

不思議なもの

1. ヤマカマス

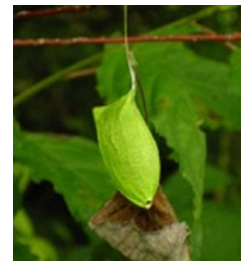
𦉳(かます)という漢字は読めない方が多いでしょう。かますの用途は米などを入れる容器で、藁(わら)で編んだ筵(むしろ)を折って三方を閉じたものです。俵と異なり、今の紙製の米袋と同じ発想の物入れです。昔の人には身近にありふれたものでしたから、呼称に用いられたのです。

枝先にぶら下がる緑色の物体に目がいってしまうのですが、それは葉が落ちた時期の話です。正体はウスタビガというカイコの仲間の繭(まゆ)です。幼虫は木々の芽出しとともに孵化(ふか)し、6月中には繭を作って蛹となります。11月の寒さを感じる時期になって成虫が羽化します。したがって私達が気付くときは繭の中身は空っぽということになります。



ウスタビガ

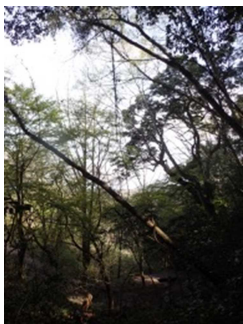
繭を観察すると非常にうまく作られていることに気づきます。カイコやヤマユは繭の一部を破って羽化しますが、ヤマカマスにはそのような痕はありません。上の直線になっている部分が小銭入れの「がま口」になっていて、両側から力を加えると開きます。また、下側先端には水抜き穴があり、中に水が溜まりません。枝についている紐をたどると、上側3枚目の葉の付け根あたりまで糸を巻きつけて風などで飛ばされない構造となっています。



ヤマカマス

ヤマカマス科は、発生個体数が年により大きく変化します。成虫が水銀灯に飛来しますので、11月に成虫の発生を確認してから食草であるコナラやクリの落葉した低木での繭探しがよいと思います。

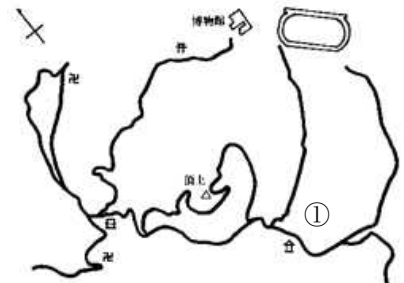
2. つる植物の伸び方(地図中①地点)



大木から垂れ下がるつる

遊歩道を歩いていて不思議だなと思うことのひとつ、スダジイやシラカシの大木から垂れ下がっている「つる」です。峠の展望台下打吹山の東斜面で目立ちます。ノダフジやテイカカズラ、ヤマブドウの太いつるがうす暗い樹下に見ることができます。高い樹冠まで独立して登っているように見えます。幹があまり肥大しないつる植物は、支えるものがない空間をどうやって高い所まで登ったのでしょうか。

太いつるではなく、まだ年数を経ない細いつるを見てみましょう。宙に向かって伸びているのはせいぜい1mばかりです。樹木の幹に付いているつるは細いながら高く上がっています。フジは巻きつきながら、テイカカズラは付着根の吸盤で幹肌に張り付いています。写真のように運悪く？(良く?) 支えに使った木が枯れたり剥がされたりすると、宙に浮いてしまいます。しかし、すでに上部が大きな木まで届いていれば引っ張りに強いつるは全体が地上に落ちることなく宙釣りになり、余ったつるが真下の地面に付き根を出せば、そこからつるを真上に伸ばしていったことになるのです。つる植物が利用した木より長生きをすることが不思議な光景を生む原動力といえます。



幹に付着したつる



遊離したつる